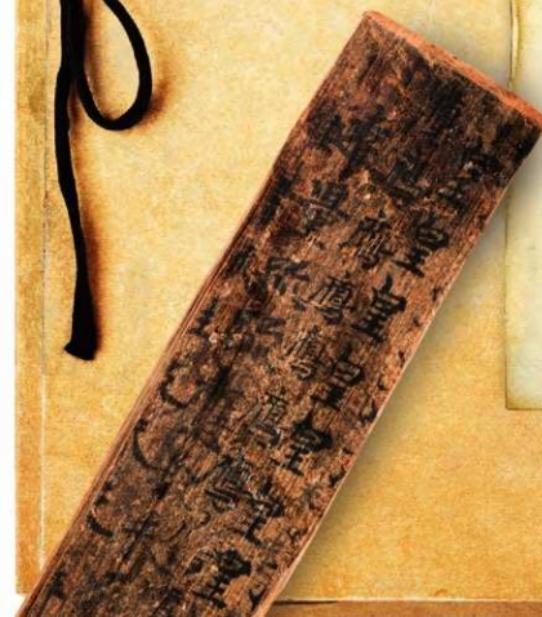


御文庫

平成 25 年度 平城宮跡資料館 秋期特別展

地下の正倉院展
木簡学ことはじめ



こあいさつ

二〇〇七年より毎年開催している「地下の正倉院展」も、今年で七回目を迎えました。今回も三回にわたり、合計八〇点以上の木簡を出品いたしました。木簡はとても弱い遺物のため、普段はなかなか実物をご覧いたくことができません。この展示が、多くの方々にとって、本物の木簡に親しく接していただけた機会となれば幸いです。

今年の主役は、今からちょうど五〇年前、平城宮跡発掘調査部が発足した年に平城宮跡・内裏北界宮跡のゴミ捨て土坑・SK820より出土した木簡たちです。このSK820出土木簡は総計が一八〇〇点以上にのぼり、また内容的にもバラエティに富んでいます。それ以前の平城宮跡出土木簡が西〇数点に過ぎなかつたことを考えれば、まさに空前の大出土といえるでしょう。当時の調査員たちの喜びや驚き、それ以上に調査や保管の苦労はいかばかりだつたか——往時の情景に想いを馳せつつ、その中の試行錯誤を通じて磨き上げられた木簡学の基礎部分についても理解を深めながら、お楽しみいただければと思います。

最後になりましたが、平城宮跡発掘調査部（現・都城発掘調査部平城地区）の創設五〇周年を慶祝するとともに、今回の展示にあたり、ご協力を賜りました関係機関・関係者の皆様に、あつく御礼申し上げます。

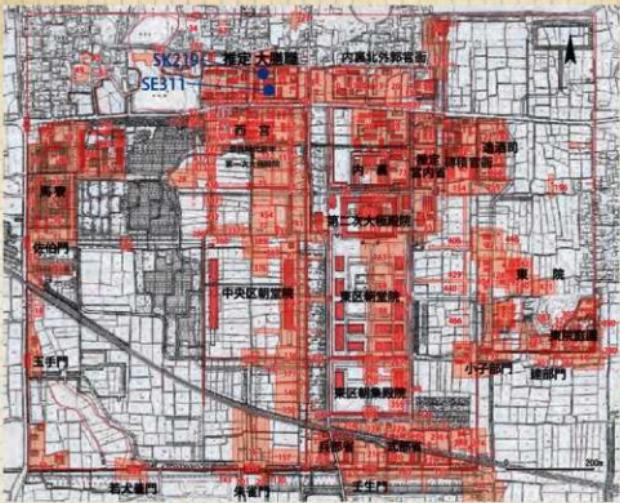
「〇一三年一〇月

独立行政法人 国立文化財研究所

松村 恵司

1. このリーフレットは、奈良文化財研究所平城宮跡資料館でおこなう秋期特別展「地下の正倉院展—木簡字ことはじめ」にちなんで編集したものである。
〔会期2013年10月19日(土)～12月1日(日)〕
2. 木簡の保存に万全を期すため、会期中に2回の展示替えをおこなう。
3. 木簡の写真は、特に明記したもの以外は、寸寸の75%に縮小して掲載した。写真下のアラビア数字は、今回の展示における通し番号を示す。
4. 木簡の写真是、原則として、文字のある面をすべて掲載することとした。ただし、一部、片面のみを掲載したものもある。その場合、通し番号の右に表記を記した。
5. 本特別展は、当研究所都城発掘調査部史料研究室が企画し、企画調整部展示企画室の全般的な協力を得た。
6. 本書の編集は、史料研究室 山本祥隆と展示企画室 渡邊淳子が担当し、展示企画室 加藤真二、中川あやが協力した。本文の執筆は、山本がおこなった。木簡の写真是、企画調整部写真室 中村一郎が撮影し、建物移設後は、山本がおこなった。木簡の写真是、企画調整部写真室 中村一郎が撮影し、建物移設後は、山本がおこなった。木簡の写真是、企画調整部写真室 中川あやが協力し、展示企画室 市原タダシ、廣瀬洋子が補佐した。
7. 今回の展示にあつては、以下の諸機関のご後援を得た。記して謝意を表する。
国土交通省近畿地方整備局奈良歴史公園事務所・奈良市教育委員会・奈良市教育委員会、読売新聞社・近畿日本新聞株式会社・奈良交通株式会社・株式会社南都銀行・木簡学会

プロローグ はじまりの木簡たち



平城宮跡最初の木簡の出土地点
木簡の内容から、奈良時代後半、SK219・SE311を検出した
区画は平城宮内勤務する官人たちの給食センター・大膳寮であった可能性が高まった。朱雀門の真北、平城宮の中軸線上に位置し、当初は
内裏の存在が想定されていた地区である。(赤番号字は、発掘調査次回)



推定大膳寮 土坑SK219 発掘調査(1961年1月)



推定大膳寮 井戸SE311 発掘調査(1961年9月)

蔵庫の購入が決定された。

● 1930年 払田権跡(秋田県)

● 1928年 抽井道路(三重県)

タクサン! ナンカ字イ書イタルデ
平城宮跡で最初の木簡出土、その瞬間のナマの肉声! 一九六一年一月二十四日、小雪がちらつく真冬の発掘現場に響いた第一声は、日本の木簡字の本格的な幕開けを告げる力強どなつた。

声の主は寺田栄藏氏、当時奈文書技術補佐員。「タクサン」は田中琢氏、のちに奈文研究所長に就かれる田中氏も、当時は二〇代の若き調査員である。

この発見以前は、研究者たちの間で最も、古代人たちが日常的に木に文字を記していたなどといふ認識自体が希薄であつた。当然、保管や調査のノウハウなど存在しない。「木簡」という用語すら確立していないかった感もある。最終的に、のちに大膳寮跡と推定されるに至るこの現場の、これまでのちにSK219と名づけられるこの土坑からは、計四〇点の木簡が出土した。だが、折しも季節は春へと向かい、気温は日々高くなる。木簡はホルマリン水に浸けて保管することになったが、それだけで劣化を食い止められるだろうか——この木簡たちを真夏の炎暑から守るために、奈文研究所では初となる電子冷

「木簡」の誕生とそれ以前の木簡たち
木簡の「簡」はなぜ竹冠か。それは、木簡とともに竹簡も多用する中国で正式には木製のものは「簡」と称し、竹製のものを「簡」と呼ぶから。「木簡」は日本風の(やや不自然な)呼び名なのである。平城宮跡最初の木簡出土は、「木簡」という用語が定着する契機ともなった。一方、戦前に報告された出土事例も、少數ながら存在する(三重県袖井遺跡出土木簡や秋田県払田権跡出土木簡など)。これらは言わば、「木簡」以前の木簡たち。現在その一部は所在となつてゐるなど、「早すぎた」出土が惜しまれる面もある。

平城宮跡

最初の木簡たち



1961年 推定大膳毬
SK219 (4点)

1961年 推定大膳毬
SE311 (2点)

平城宮跡の木簡出土

1～3は、いずれもSK219から出土した木簡。

1は、あの日最初に見つかった木簡。現場に騒ぎを巻き起こした張本人である調査員たちの驚きや興奮、そして困惑のなかでのドタバタ劇を、この木簡はどうな思いで見守っていたのだろうか。

2は、主殿寮が火を請求する木簡。單に「火」としかないが、火種のことであろう。主殿寮は宮内省被管で、殿舎の維持・管理や天皇が行幸する際の諸施設の設営などを担当した。

3は、柏の葉につけられた付札。小振りだが、左右の削りや表面の仕上げは劣に丁寧。柏の葉には青物と干物の二種類があり、皿や容器のフタとして使われていたようである。

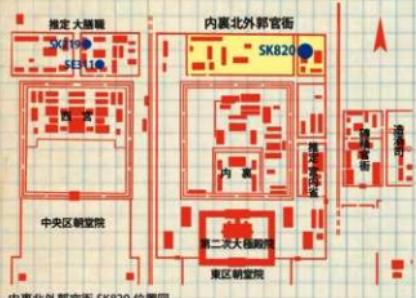
つづいて、同年夏の現場では捨板の残る大きな井戸・SE311が見つかって、中から二点の木簡が出土した。ただ、この井戸は都が平城京から長岡京、そして平安京へと遷り、不要となつたのちに埋まつたものであるから、木簡の年代も平安時代初頭に降るようであるちなみに、SK219出土木簡の年代は天平宝字七年（七六三）前後と推定されている。

こうして、平城宮跡出土木簡の総数四二点という状況で、一九六三年八月を迎えることとなる――

I 空前の大出土！・SK820



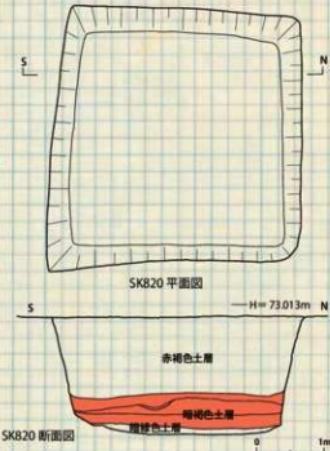
SK820の発掘
実施結果 SK820は核出面からの深さが約一
三〇で、下に向かって少しづつ狭まり、底面は約三
四方であることもわかった。人が何人を入れる目
大なゴミ捨て穴である。



内裏北外郭官衙 SK820 位置図



SK820 発掘調査風景（1963年8月）



木簡が出土した SK820 の全容

断面図中の「暗褐色土層」（赤色部分）から、木簡をはじめとするさまざまな遺物が出土した。その上は遺物が少ない赤褐色土で覆われており、この土坑を掘ったのち間もなく、短期間に大量の遺物が捨てられ、その後に一気に埋め戻したことを物語っている。

八月、平城宮跡北端に近い発掘現場で、やや奇妙な土坑が見つかった。平面形は一辺四〇ほどの方形で、井戸と見まごうほど整ったかたちをしている。掘り下げるに、検出面より一・五メートルを超えたあたりから、急激に遺物の出土が多くなった。土器、瓦、曲物や檜扇、植物の種まで、多士済々の遺物たちが眠っていたのである。断面観察からは、これらがみなゴミとして一時に捨てられ、短期間の間に埋められたことも判明した。

この土坑・SK820の中には大量の木簡も埋まっていた。その数なんと一八〇〇点以上！最初の発見からわずか二年半後、まだまだ手探りの調査がつづく時期に、平城宮跡出土木簡の総数は三桁を跳び越え、一気に四桁の大台に突入したのである。もう、とても冷蔵庫には入りきらない！木簡たちは種類も多様多様であった。特に扱いに困ったのは削屑（さくじやく）であろう。まるで筋節のような削屑は、それこそ触れただけでは巴拉巴拉に壊れてしまうほどに脆い。割り箸状に裁断されて、まつたく飛沫（ひめき）不能なものも多かった。こんなもの、どうやって扱えると言ふのか——調査員たちの悲鳴や嘆き声が聞こえてくる。

当時を知る人たちにとって、一九六三年は、記録的な猛暑の年として記憶されているらしい。

そんな酷暑のなかでの夏の調査が、木簡研究の歴史の中でもまさにエポックメイキングなものにならうとは、誰にも予想できなかつただろ。

たくさんの細片たち
出土する木簡のほとんどはこんなモノ…

割り箸のように裁断された木簡たち
細く細かく分断されて、もはや一文字も読めないものも多い。実際には、このような「読めない木簡たち」が出土木簡の多数を占める。

参考尺は任意

鰹節のような削片たち

木簡は、文字面を刀子（小刀）で削りとれば何度でも再利用できる。その結果の産物が削屑であり、木簡独自の特性を示すものといえるが、まるで鰹節のような木つ端はとにかく扱いに困る難物である。

さまざまな木簡たち

かたちも、なみも、多種多様…



10



9

「西宮」と書かれた木簡 1 上の一「東」は「門」からば、下の「東」は「門」の字が省略されていることがわかれ。



ひ
ひ
せ
た
れ
太
三
木

11



兵士に問わる木簡

表面の「火長」は、一〇人一組の兵士集団の隊長のこと。何か事件でも起つたのか。



同じ字を繰り返し書いた木簡

文字の練習だろうか。いつの時代にも面白大い人はいたようである。



13



12 裏

文章が墨線で抹消された木簡 用か済んで不要となつたことを示すのか、あるいは單に書き間違えたのか。



17

「西宮」と書かれた木簡 2

表面上の文字は半分しか残っていないが、9の文字と対比べればよく読めるだろう。

切り込みがある木簡

文字はほとんど読みなくなつてしまふが、上端の切り込みは深くするとい。



8

紐が残る木簡

類似品の使用法を示唆する。紐まで残つていてもほんと珍しい。



丸い栓のような木筒

特徴的な丸いかたちからは、「栓の可能性」が考えられる。すると「十五斤」は中身の重さだろうか。



二枚の板を桜皮で継じた木筒

横からみると、二枚の板が重なっていることがよくわかる。何かの製品の一部であろう。



等間隔で横線が引かれた木筒

裏面には文字はなく、一定間隔で墨跡が引かれるのみ。思ひ浮かぶのは… そら、物語!

ほぼ同型で孔が開く木筒たち
それぞれの模様や孔の位置がほぼ揃つ。
用途不明の、ナゾの木筒

23



かわった木筒たち こんなのもありました…

太い材に書かれた木筒

断面は正方形に近く、ほとんど角材のようである。よくみると、裏面下端には挟りも入っている。



何のため？ 似たような木筒たち

薄く小さな札状の木片はそれぞれ
かたちがよく似てあり、書かれる
のはいずれも繊維製品の名前…
何に使ったか、わかりますか？



24 ~ 26

※ 19、22 ~ 26 の縮尺は任意

II 木簡学の基礎、確立

これが、日本古代木簡の三本柱

荷物に括りつける荷札と、倉庫などで管理用の狭義の付札の2タイプがある。荷札には発送者の名前や住所が記され、紐をかけるための切り込みを持つものも多い。付札は、内容は物品名だけの簡潔なものも目立つが、端正な作りのものが多いのが特色。丈夫で水にも強い木の特性を活かした使用法といえる。

門を守衛する兵衛（兵士）の配属記載の木簡。真ん中の右名
には印がついており、実際に使われた様子うかがえる。



27



文字が木簡たらしめる不可欠要素である以上、やはりもっともベーシックな機能は文書である。その中には物品管理や人員配置の記録、他者に宛てた書状や呼び出し状、閑所を通過するためのパスポートまで、多彩な内容を含む。

S.K.820出土木簡を総覧すると、さまざまなタイプの木簡がバランスよく含まれていることに気づく。どんな種類の木簡がどのように使われていたか、古代日本における木簡利用の実情をうかがう重要なサンプルとなったのである。

文書・付札、そして習書。多くの例外を含むのはもちろんだが、やはりこの三つの用法こそ、日本古代木簡の三本柱と位置づけられよう。ここに木簡学の基礎が確立することとなり、それは現在の研究水準においても、高い有効性を保持しつづけていると言える。

33〇氏の付札。

三文字目の一「隻」という単位は、生きた魚に近いかたうであることを示す。



つけふだ



65



32



しゅうしょ

奈良時代には、建築部材や各種の木製品など、人びとの身近に多くの木材があった。そのため、端材や不要品に文字の練習をした習書は、日本古代木簡の柱のひとつに据えられる。なかには文章をフレーズ単位で書きつけたものもあり、官人たちの苦労や勤勉さが想われる

54裏

のちの調査で出土した文書木簡



46



45



29



59

59がSK820出土の文書木簡、
29・45・46がのちの調査で出土した文
書木簡の事例である。
59は中務省の少丞(三等官)である
池田足綱が薬を検査。(ヨチエフク)
たことを記す。数字は「陸」など西数
の多い字(大字)が使われている。
29は木材の進上状、炭の進上状も近
くで出土している。59の薬といい、大
勢の人人が集まる都では、さまざまな資
材が必要とされた。

45は「西坊」に貸し出した玉笥に関する記録。受領の責任者や返却の有無
も記されており、段階に応じて追記さ
れていた可能性も考えられる。
46は飯の請求状。「大人」は請求者の
名前。食料を請求する木簡は数多い
が、これは「飯一升計」と、やや自
信なさげなのが微笑ましい。



のちの調査で出土した付札



33・48・49がSK820出土の付札、
その他がのちの調査で出土した付札の
事例である。

33・49はともにアワビの付札。形状
も似通っている。アワビは「鮑」また
は「鮑」と書く。49は「鮑」となつて
いるが、「鮑」の例もあるから、これ
もアワビのつもりで書いたのだろう。

48は大宰府からの鮑の荷札。上下両
端に切り込みをもつ。SK820から
は鮑の荷札が多く出土したが、その後
はほとんど見つかっていない。

49は伊勢国からの米の荷札。二人が
三斗ずつ負担し、あわせて六斗で一俵
としている。荷札には切り込みと尖り
を併せ持つタイプもある。

51もアワビの付札。33・49とよく似
ている。ただし、49が「生」のアワビ
なのに対し、こちらは「熟鮑」である。

熟鮑はほかに例がないが、あるいはな
れ鮑のことであろうか。
66は上総国からの荏胡麻油の荷札。
荷札の切り込みは上下両端にある場合
と上端のみの場合があり、時には下端
のみという珍しいものも見つかる。

67は稚魚の「膾」の付札。膾は干物。
非常に丁寧に作り込まれ、文字もよく
整っている。

69は若狭国からの塩の荷札。若狭は
塩の大生産地である。文字はほとんど
読めないが、上下両端に切り込みが
あるのはよくわかる。



38



42 表



71

司書
じゅうしょ

38 が SK820 出土の習書木簡、
40・42・58・71 がのちの調査で出土し
た習書木簡の事例である。

38 には、「ほとんど重ねるようにして
なさんの文字が書かれている。裏面
の一部は天地逆に記されるなど、何度も
かにわたって書かれた様子もみえる。
40 も 38 に似て、多くの文字が重ね書
きされている。文字に燃やす古代人の
情熱は、ほとんど懇念に近いものだつ
たのかもしれない。

42 は、不要になった檜扇を習書に転
用したもの。檜扇はヒノキの薄い板で
作った扇で、下端には「孔」の字も開けら
れている。その性質上、習書はさまざ
まな材になされる傾向にある。

58 には、「壳」「買」という関わりの
深い二字が書き連ねられている。書き
手の思考回路が垣間見えるよう。

71 には、「末主使」の三文字が、三回
つづけて書かれている。習書は一文字
単位のみでなく、数文字の単語単位や、
時には文章のフレーズ単位でなされる
こともあった。

38 が SK820 出土の習書木簡、
40・42・58・71 がのちの調査で出土し
た習書木簡の事例である。

38 には、「ほとんど重ねるようにして
なさんの文字が書かれている。裏面
の一部は天地逆に記されるなど、何度も
かにわたって書かれた様子もみえる。
40 も 38 に似て、多くの文字が重ね書
きされている。文字に燃やす古代人の
情熱は、ほとんど懇念に近いものだつ
たのかもしれない。

42 は、不要になった檜扇を習書に転
用したもの。檜扇はヒノキの薄い板で
作った扇で、下端には「孔」の字も開けら
れている。その性質上、習書はさまざ
まな材になされる傾向にある。

58 には、「壳」「買」という関わりの
深い二字が書き連ねられている。書き
手の思考回路が垣間見えるよう。

71 には、「末主使」の三文字が、三回
つづけて書かれている。習書は一文字
単位のみでなく、数文字の単語単位や、
時には文章のフレーズ単位でなされる
こともあった。



40



58

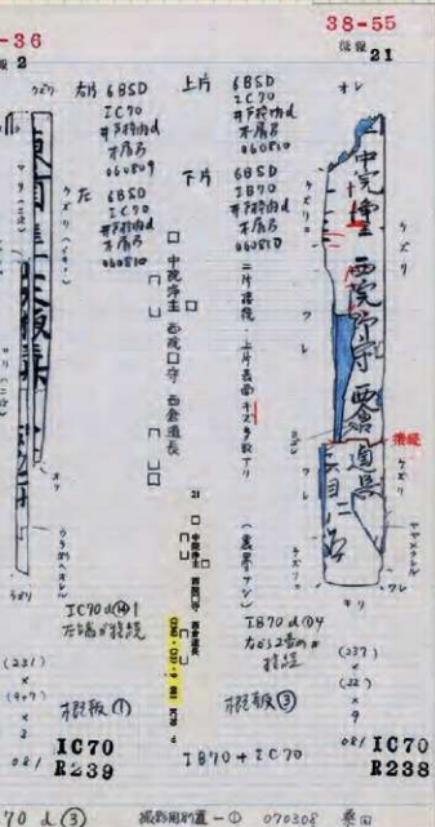
III 広がる木簡学

記帳ノート

木簡研究の基本

木簡を読む——「言うは易し、行うは難し」とはこのことであろう。木簡の文字は、薄れていたり、クセが強かつたり、割れて半分しか残っていないなど、一筋縄ではいかない難物が多い。もちろんかには美しく読みやすい筆跡のものもあるが、そういった木簡は少数派である。

そのため、木簡を読むには記帳が欠かせない。記帳は、いわば古代人の筆記を追体験する作業。墨線の輪郭をなぞって中を塗りつぶすのは御法度で、筆の動きや流れを追うことが最重要。その成果が記帳ノートであり、「ここにはモノとしての木簡の観察記録もつまっている。



現在の記帳ノート

50年間の試行錯誤をへて、現在の記帳は格段に精緻さを増している。特に四周の状態や表面のキズなど、モノとしての観察結果が細かく記録されるようになり、必要に応じて色鉛筆なども使われている。

初代記帳ノート

おそらく当初は「記帳」という呼び名すら確立していなかつたろう。手探りでの調査・研究のなかで編み出された手法は、先輩から後輩へ連続と受け継がれ、木簡研究の基本となった。(左端にみえるのは10頁の59の木簡)



名を有す女房也。男房也。男房也。男房也。男房也。男房也。男房也。男房也。男房也。男房也。

正六位下藤原朝臣麻吕、從五位下○皮牛頭曰。國稅、相稅、貢稅有差。
長短不等或一丈九尺或八尺或七丈一尺。若其直貢者直稅事類。
安樂理應均輸有精良無貪財不可以一毫強貪財之理。布賦有增
稻有不使宜隨使用更定。歲所宜量。丁輸物作安種條例。百口以
後北陸百姓開墾及中男正課其數。僕主租科無所宜。及後平別
用稅。並種地土所出芳草。後中男者。中男不足者。則以折役。耕滿於是
太政官請奏。精良相給。長夏賦課之法。請在裕中○丁巳重陽日和泉關
宮。河内國。今年興。國司。參有考。正月十二日。太政官處分。如授
五袋及。從外任遷京官。食會。同給。且仍入歸例。丁亥令。美濃國。立奉
曉。相稅。貢。於京甚。應酒頓。

文献にみえる「中男作物」

續日本紀養老元年(七一七)一月。元葉。正月。十二。二〇〇
歲の男子には、胸の三〇分の一程度の割合が科され、また中男にも正
丁の四分の一の割合がかけられていたが、兩者のを既止し、中男作物の制
度を開始することが記されている。(色付が該當部)

木簡で明らかになった

租税の実態

札も多く含まれていた。それにより八世紀の貴
の様相をうかがう手がかりが得られ、研究が飛躍
的に進展したのである。

中男作物も同様の例として挙げられる。中男作
物は、養老元年(七一七)に調附物。調の付加

多彩な内容を含むSK820出土木簡。その意
義は多岐にわたるが、租税の実態の解明に果たし
た役割も大きい。貧は海産物を中心とする食品を貢上
する税目で、主に天皇の食膳に供される。しかし
貧は律令に規定がみえず、續日本紀以降の歴史書
にも登場しない。十世纪に編纂された延喜式には
詳しく述べているが、八世纪段階の姿はペー
ルに包まれていた。一方、ときには「荷札のデバ
ト」と称されるSK820出土木簡には、貧の荷

札には規定がない。その中男作物の荷札が、SK
820からは八点出土したのである。それらには
いずれも、貢進者の個人名を記さないという、調

の荷札とは異なる特徴が認められる。この書式は、
中男たちの集団労働により官司の必要物資を調達
するという、中男作物の租税としての特質を反映
したものとされる。



75



81

出典: 『中男からの貧の荷札』—「毛湯藻」はワカメのこと。謹正な謹語で、「貧」の字もよく読める。



82



出典: 『中男からの貧の荷札』—「毛湯藻」はワカメのこと。謹正な謹語で、「貧」の字もよく読める。

調として納められた荷札

割れて上半は読みづらいため、下半の「天平十八年十月」はよく読める。



SK820 出土の紀年銘木簡 ※木簡の縮尺は任意

通常、荷札には荷物の発送作業の過程で年月日が書き込まれるが、月または年までしか記していなかったり、まったく書かれていないものもある。もちろん、文書木簡のなかにも年紀を有するものはある。



SK820 から出土した土器群

「備後國からの他の荷札」下巻に「天平十八年」の年紀がみえる。荷札としてもなかなかの優品。



83



80



77

共伴遺物や遺構に実年代を与える 紀年銘木簡

木簡研究の広がりは、「木簡の研究」だけに留まらない。特に紀年銘木簡は、出土遺構や共伴遺物に対して重要な働きかけをする。

紀年銘木簡とは、「年紀」が書かれた木簡のこと。例えば「天平元年」と書かれたアワビの荷札が見つかれば、その遺構が埋まつたのはその頃で、一緒に出土した土器や瓦なども同じくらいの時期のものと目途がつく。通常、考古学では二つのものどちらが古く、どちらが新しいか（相対年代）しか決めがたいが、紀年銘木簡は、西暦何年という絶対年代を示してくれるものである。

もちろん荷札の作製から廃棄までには一定の時間が必要だが、特に鮮かな海産物などは、荷札の年紀と捨てられた時点とのタイムラグが小さい可能性が高い。SK820出土の荷札は、二〇年もストックされたらしい塙や網のものをそげば年紀が天平十七~十九年（七四五~七四七）に集中しており、SK820が天平十九年の後半頃に埋められたことを明らかにした。また、同時に出土した土器群にも実年代が与えられ、現在も編年研究のための良好な基準資料となっている。

2013年10月19日

編集・発行

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町2-9-1

<http://www.nabunkou.go.jp/>

印 刷
表紙デザイン
能登印刷株式会社
市原 夕貴